

市史編さんだより 第16号

発行 令和6年5月31日

新紹介 ほうかいじ 法界寺の中世書写経

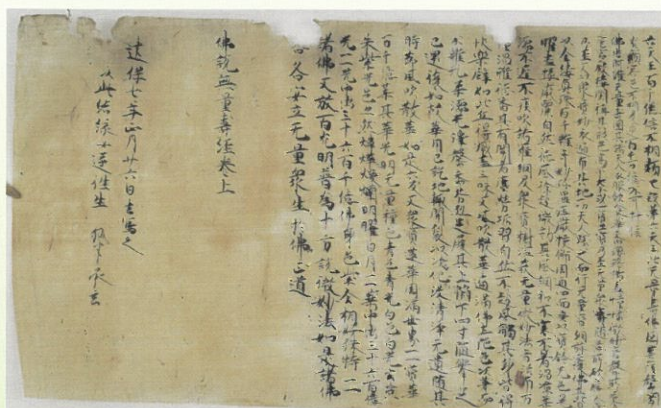


写真1 無量寿経巻上 巻末・奥書

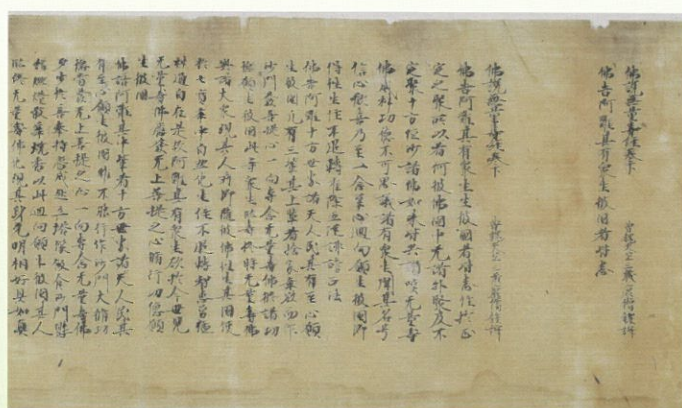


写真2 無量寿経巻下 巻首

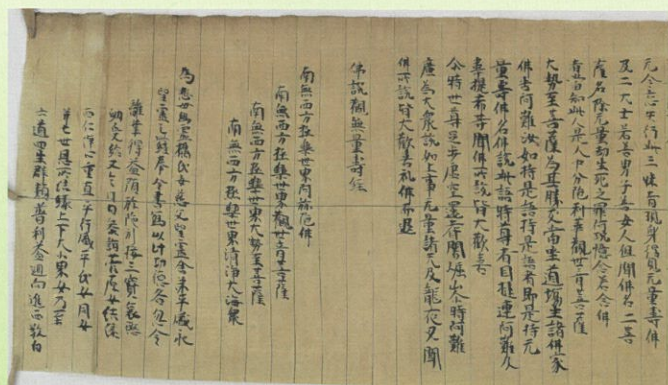


写真3 観無量寿経 巻末・奥書

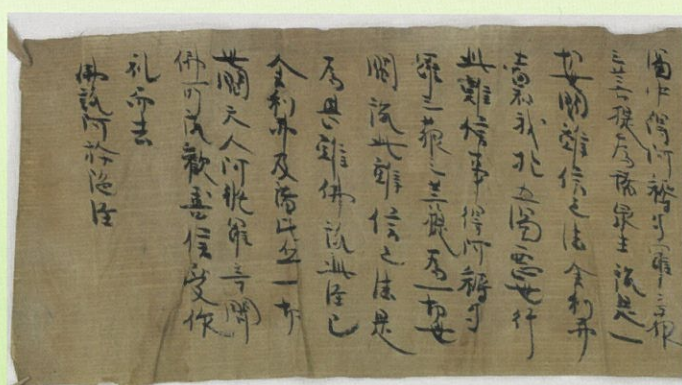


写真4 阿弥陀経 巻末

今年3月、別所町東這田の法界寺所蔵の経巻を調査させていただきました。

今回は、中世に書写された経巻を4巻確認しました。また、経巻を納める竹筒も1本ありました。4巻のうち無量寿経の巻上(写真1)は、法界寺の先々代ご住職が生前に、同寺本尊の阿弥陀如来立像の胎内に納められていたとして、竹筒とともに市史編さん室にお持ちいただいたことがあったものでした。

4巻の内訳は、無量寿経の巻上・巻下、観無量寿経、阿弥陀経で、これらで浄土三部経となります。浄土三部経は、阿弥陀如来の教えを説くもので、浄土宗や浄土真宗で根本經典として尊重されています。また、いずれもやや小さめで、縦10～14cm程度と、通常の経巻と比べて縦方向を半分にした程度のサイズです。4巻ともに本尊の胎内に納めるにふさわしい内容・サイズといえますが、詳細はなお今後の検証を待ちたいと思います。

4巻の筆跡や経巻の料紙はそれぞれ異っており、書写された年代もやや幅があるとみられます。

まず、無量寿経巻上には、「建保七年正月廿六日これ

を書写す、この結縁をもって必ずや往生を遂げん 執筆承玄」(原漢文)との奥書があります。鎌倉時代前期の建保7年(1219)に、承玄という僧侶が極楽往生の願いをこめて書写したことがわかります。

無量寿経巻下(写真2)と阿弥陀経(写真4)には奥書はありません。書風は平安後期から鎌倉前期ごろとみられ、阿弥陀経の方が古めです。

一方、観無量寿経(写真3)の書風はこれら3巻よりやや新しく見受けられます。奥書には年代はありませんが、進西なる人物が、亡き父母・弟の極楽往生と、この弔いに結縁した人々にも利益が及ぶことを願って書写すると記されています。

これらの経巻は、中世に遡る経巻として貴重であるとともに、本尊阿弥陀如来立像を考える上でも重要なものです。また、観無量寿経の奥書は、このころの地域有力者の姿を知る手がかりにもなる史料といえます。法界寺の本尊については、来年度刊行予定の市史文化遺産編で紹介される予定です。どうぞ楽しみにお待ちください。

(通史編中世史部会員 前田)

《市史の窓》三木市内で襖の下張りとなった型紙にみる東西交流

三木市の代名詞である金物より前から、美囊郡（現在の三木市と神戸市北区淡河町）でさかんだった産業を知っていますか？ それは木綿の布を中心とした綿織物産業です。これまで三木市では綿織物産業は金物の陰に隠れて見過ごされてきました。美囊郡では、綿織物産業のひとつとして型染めがさかんになり、型染めに使う「型紙」という図案を彫り込んだ和紙の型が作られていました。

現在の三木市を含む播磨地方の平野部は綿花の栽培に適しており、17世紀頃～20世紀初頭頃まで木綿の布はこの地方の特産品でした。江戸時代、木綿の布は肌触りのよさから爆発的に人気が出て一気に普及していきます。それ以前の布と言えば、通気性はよいものの、肌触りがあまりよくない麻・藤などの植物の繊維が中心でした。明治初期、美囊郡は綿花の栽培がさかんだった播磨地方のなかでも真ん中の順位につけるほどの作地面積を持っていました（『兵庫県勧業年報』（1884年））。

綿織物産地の三木町では、木綿の布に装飾的な図案を染め抜く型染めが発達していきます。型染めは染物の技法のひとつで、印刷原理を使い、型紙を使って図柄を布に配していきます。

型染めの役割をまっとうして廃紙となった型紙は、実は19世紀の終わり頃に江戸周辺から海を渡っていったことが、10年程前に明らかになりました。欧米では、浮世絵や友禅染めの着物と並ぶ芸術的な品物として、作家やデザイナーが読む近代芸術書やデザイン書に写真入りで紹介されていきます。型紙の図案は、応用芸術や装飾芸術という産業品のデザインに関わる分野で重宝され、アール・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動といった芸術運動にも影響を与えました。

さて、19世紀の三木町には、型紙を売る型屋や染物

をする紺屋が集まっており、型染めの役目をまっとうした型紙がたくさんありました。さぞかし三木町でも重宝された…のかと思いきや、実は使い道がなく有り余っていたようです。型紙は普通の和紙とは違い、3～4枚の和紙を柿渋という塗料でコーティングしてたいへん丈夫です。そのため、ちぎったりねじったりといった細工や、包んだり丸めたり敷き詰めたりといった梱包材・緩衝材の役目には向いておらず、廃紙としての使い道が限られていたようです。素材としては、型紙は書き損じたくず紙よりも使い道がないものだったようです。そこで、廃紙となった型紙は、襖に保温性や湿度の調整機能を持たせるための下張りとして、襖の内側に閉じ込められてしまいます。そこでは欧米の作家やデザイナーを魅了した装飾図案としての役割は少しも期待されていませんでした。しかも、型紙の透かし彫り

はいわば紙に開いた穴。襖の内側に紙の層をつくって保温機能を持たせるためには、空気が逃げないように穴が開いていない紙の方がいいので、型紙は襖の下張りの素材としても不十分だったのです。しかし、三木市では、現在までに三か所の別々



写真 令和6年3月に襖の下張りから見つかった型紙。市内では3例目となる。

の家屋の襖のなかから、計100点以上の型紙が見つっています。三木町には捨てるには惜しいほど、膨大な量の型紙の廃紙が有り余っていたことが想像されます。

型紙の廃紙は、かたや、欧米の近代芸術書やデザイン書に掲載されて作家やデザイナーのインスピレーションの源となり、かたや、襖の下張りの素材として人知れず襖の構造をつくる一部となりました。型紙がたどった数奇な運命は、日本で当たり前に使われていた手工芸品やその図案が、欧米でどれほど高く評価されたのかを教えてください。（小澤）

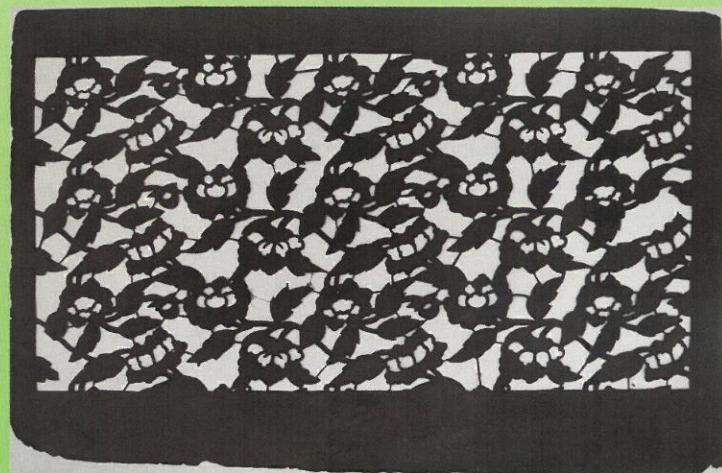


写真 三木市内に現存する型紙の一例（三木市立みき歴史資料館所蔵）

市史編さん室が行う「調査」とは？～民俗調査 その2

その1では民俗調査がどのようなものか、さらにみなさん一人一人の記憶が地域の歴史を明らかにするのに必要であることを紹介しました。

この度『新三木市史地域編3 別所の歴史』が刊行されました。本の発刊に向けて別所地域をまわり、いろいろな行事を調査させていただきました。今回は民俗調査をするにあたって、こちらが知りたいと思っているのはどのようなことなのか、また、どのようなことを意識しながら、調査を行っているのかをご紹介します。

＊ ＊ ＊

市史編さん室では調査に入る前に、行事などに関するアンケートを行い、年間の行事予定などを区長さんにご回答いただいています。このアンケートを基に日程や内容などからいつどこに調査へ行くのか検討して進めています。

まず、調査対象の行事について情報を集めます。地域の方（基本は区長さん）にご連絡し、行事がどのように行われているのかを教えてください。また、市史編さんの部会員（地域から数名を選出）にもお手伝いをいただいています。その情報から宮司さんや住職さんなどの関係者の方々に連絡し、見学などの許可を得て調査をしています。

はじめに、行事がどのように始まったのか、どのような意味で行われているかなどを教えてください。調べたりします。

次に、時代とともに行事は変化していきますが、どのようなことをきっかけにして変化したのか、なぜこの行事がなくなってしまったのかなどをお聞きしています。その理由は、生活スタイルの変化や災害など、従来のように継続できなくなってしまった

というのがほとんどです。ただ行事がなくなっただけのように思いますが、その背景にはいろいろな問題が隠れていて、とても重要です。

祭り屋
たいほうのう
台や奉納
ずもう
相撲への
参加は男
の子だけ
が許され
ていまし
た。女の
人は屋台
に触れる



写真 女の子による奉納相撲

ことすらできませんでした。今では女の子の参加も認められています。それでも子どもが少ない地区では奉納相撲自体が行われなくなっています。

他にも行事の開催日を決まった日（平日になることもある）から、できるだけたくさんの方が参加しやすいように、土曜日や日曜日に変更されています。お祭りが決まった日に行なわれていた時には、地区の祭り当日は学校から早く帰ることができ、子どもの頃とても楽しみにしていたとお聞きしました。大宮八幡宮の秋の大祭の日は、三木市内の会社もお休みになっていたそうです。

さらに、この数年はコロナの影響がとても大きく、行事をそのまま行うことが難しい時期がありました。それでも昨年（令和5年）からは従来の方法に戻して行われるものも増えてきましたが、コロナで簡素化した方法をそのまま取り入れた行事が行われるようになったところもあり、新しい変化が生まれました。コロナの前後でどのような違いがあるのか、注意しながら調査しています。

行事を続けていくことは、簡単なことではありません。地区のみなさんの協力や理解があって成り立っています。今は続いている行事でも数年後にはなくなってしまうかもしれません。行事・祭礼でどのようなことが行われているのか記録し、『新三木市史』に書き残すことで今の行事や生活などを伝えることができます。

今後も調査は続く予定です。こちらからお声がけさせていただくこともあるかと思いますが、引き続きご協力お願いいたします。（中谷）



写真 お祭りの屋台（令和5年）

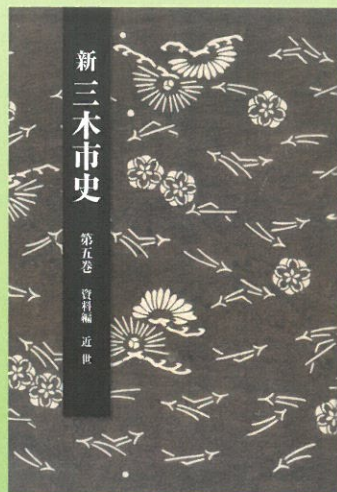
編さん室トピックアップ

新三木市史第5巻『資料編 近世』、地域編3『別所の歴史』の発刊

令和6年3月31日付で、新三木市史の配本8冊目・9冊目となる第5巻『資料編 近世』、地域編3『別所の歴史』を発刊いたしました。

通史編は、《学術的水準の高い市史》というコンセプトのもと大学教員を中心とする専門研究者との連携により編さんが進められています。『資料編 近世』は、第1部では市域の近世史を理解するうえで最重要の史料を厳選し、史料写真、翻刻（文字おこし）、解説を掲載しました。また第II部では、慶長年間けichoのものを中心とする検地帳けんちよう、村明細帳むらめいさいちよう、触留ふれどめといった大部にわたる史料の全翻刻と簡単な解説を収載しました。

また地域編は、《住民参加の自治体史編さん》というコンセプトを実現するため、本の制作全般にわたり、地域住民の方々にご参加いただいております。地域編



としては7冊目となる『別所の歴史』も、多くの地域住民の方々のご協力のもと完成いたしました。発刊にあたり、改めてお礼申し上げます。

通史編第5巻『資料編 近世』（頒価 3800 円）

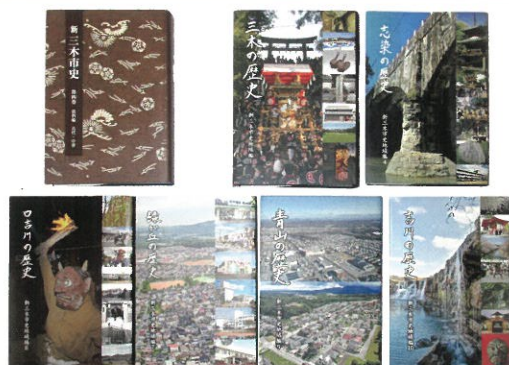
地域編3『別所の歴史』（頒価 3000 円）

新三木市史 既刊分も好評発売中！

新三木市史は、新刊2冊に加え、既刊分（通史編1冊、地域編6冊）も好評販売中です。市史編さん室（郵送対応もしています）、みき歴史資料館、三木市観光協会、山田錦の館、市役所内福祉コンビニ・たんぽぽ、三木市立中央図書館、別所町公民館（『別所の歴史』のみ）で販売しています。

お問い合わせは、市史編さん室まで（連絡先は、下記奥付をご参照ください）。

《既刊分》	
通史編	
第4巻 資料編 古代・中世	¥3800
第5巻 資料編 近世	¥3800 NEW
地域編	
1 『三木の歴史』	¥3800
3 『別所の歴史』	¥3000 NEW
4 『志染の歴史』	¥3000
6 『口吉川の歴史』	¥3000
7 『緑が丘の歴史』	¥2500
9 『青山の歴史』	¥2500
10 『吉川の歴史』	¥3500
(いずれも税込み)	



古い資料や写真を探しています！

皆さんのお近くにある古い記録類は、地域の歴史を語る大切な歴史遺産です。下記のような資料の情報をお持ちの方は、ぜひ市史編さん室までご一報ください！

◆くずし字で書かれた帳面や一枚ものの文書などの古文書◆明治・大正・昭和の古いノートや記録（日記・手紙など）◆三木市域の古い写真、絵画、映像など◆自治会などの団体、地域でのグループ活動などの記録や資料◆古いふすまや屏風（古文書が、下張りに使われていることがよくあります）etc.

市民ボランティア募集中！

市史編さん室では、市内の文献資料を記録に残す作業を行う市民ボランティアを募集しています。古文書が読めない方でも参加可能です。見学だけでも大歓迎です。詳しくは市史編さん室までご連絡ください。

◆開催日時：毎週水・木曜（どちらか1日の参加でもOK）13:00～15:00／場所：みき歴史資料館2階市史編さん室

活動内容：①古文書のデジタル撮影、②江戸時代以降のくずし字解読（翻刻作成）、③資料の修復（しわのぼし・糊づけ等）、④新聞検索（各紙から三木に関する記事を選別）、⑤古文書現物からの目録作成、⑥パソコンでの目録データ入力

市史編さんだより 第16号（令和6年5月31日発行）

編集発行：三木市総務部 市史編さん室

連絡先：〒673-0432 兵庫県三木市上の丸町4-5 みき歴史資料館2階 電話 0794-83-1120 / FAX 0794-83-1190

ホームページURL：https://www.city.miki.lg.jp/soshiki/9/